

## 60歳以下での心臓血管病予防で認知機能低下の発症を遅延

早発性（60歳以下）の心臓血管病（以下、CVD）が脳の健康に果たす役割を理解するために、早発性 CVD と中年期の認知および白質の健康との関連性について前向きコホート研究を実施し検討した。

試験開始時（1985～86年）に18～30歳の3,146人（平均年齢55.1歳・女性57%・黒人48%）で、異なる領域を測定する5つの認知テストを実施し、30年間追跡した。結果、5%（n=147）に早発性 CVD が認められた。人種、教育、識字率、所得、抑うつ症状、身体活動、食事などを調整すると、早発性 CVD は5領域中4領域で認知力の低下と関連していた：認知全般（-0.22）、言語記憶（-0.28）、処理速度（-0.46）、遂行機能（-0.38）。早発性 CVD は白質高信号域の増大（全葉、側頭葉、頭頂葉）および白質平均拡散率の上昇（全葉および側頭葉）と関連していた。これらの関連は、心血管危険因子で調整後、脳卒中の患者を除外しても有意に保たれた。早発性 CVD は5年間の認知機能低下の進行とも関連していた（調整オッズ比3.07）。

したがって、早発性 CVD は中年期の認知および白質の健康の悪化と関連することが示されたが、これは必ずしも脳卒中によるものではなく、心血管危険因子とも関連しなかった。成人早期の CVD を予防することで、認知機能低下の発症を遅らせ、脳の健康を促進することができる可能性が示唆された。

出典：Neurology. 2023 Jan 25. doi: <https://doi.org/10.1212/WNL>.